競技スポーツと教育としてのスポーツのはざまで

梅 崎 高 行

1．エピソード

自由時間に園児たちは、様々な遊びに興じる。筆者が訪れた幼稚園では、そのとき年長男児４人がハンドボールをしていた。

一方のチームの男児がまさにシュートを放とうとしたその瞬間、ゴールを守っていた仲間の男児が、「パス！パス！」と声をかけた（図１）。しかしプレーは続行され、男児はパスを受けることができなかった。そして男児は、そのできごとを担任の教師に告げたのである。どうやら園児たちのクラスでは、「お友だちがパスと言ったらパスをしてあげる」という約束が交わされていたようだ。男児の訴えに担任の教師は、クラスの約束をもう一度確認する。「約束忘れちゃったかな？今度はお友だちにパスしてあげようね」。担任の言葉にシュートを放った子どもが笑顔でうなずく。

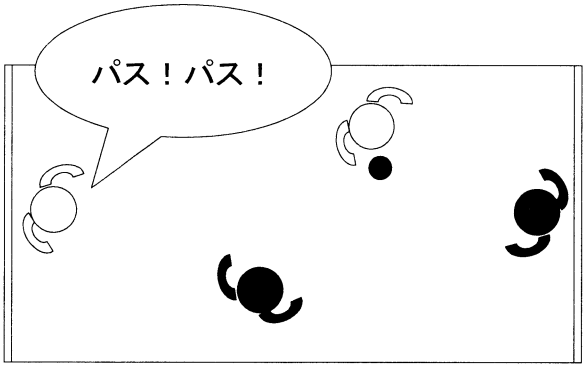

図１　エピソード

筆者は以上のエピソードを通し、教育現場で育まれる‘遊び＝スポーツを通した社会性’を確認することができる。しかし、競技スポーツの指導に携わる立場からは、同時に去来する違和感が拭えない。違和感とは、「あの場面でシュートは必至だ。彼の判断は正しかった」というものである。競技スポーツと教育としてのスポーツ、以上は両立できないのだろうか。両スポーツの間で、指導者、教師、そして研究者は、どのような立ち位置に立つべきなのだろうか。

2．体力・運動能力をめぐる本邦の課題

子どもの体力や運動能力が低下している。毎年実施される体力・運動能力調査（文部科学省、2007）では、得点の落ち込みが顕著である。最新の結果を参照すると、もはや数値の横ばいを示す測定項目もみられる。これはその能力が、これ以上は下がらないポイントにまで落ち込んでいることを示している。一方、先に閉幕した北京オリンピックでは、幼少期より海外に目を向け、専門的なトレーニングを積んだ一部のタレントたちが、世界に伍して存在感を示している。二極化と呼ぶべきこのようなスポーツ従事の現状と、これに基づく体力・運動能力の格差こそ、わが国のスポーツ教育が抱える最たる課題と考えられる。本稿では、こうした課題の解消に寄与する研究者の立ち位置について考える。結論を述べれば、競技スポーツの文脈で得られた科学的な成

果を、教育としてのスポーツ、すなわち学校体育に還元していこうとするものであり、アイディアを具体化する1)競技、2)大学、3)教育の各文脈に生きる人々の協働を、大学の研究者が牽引していくといった内容である。また、長く論争され、一般にはスポーツの存在意義とも見なされる人格形成の問題についても述べる。

3．競技スポーツで得られた知見を教育としてのスポーツに転用する

競技スポーツで得られた知見を教育としてのスポーツに転用していくといったアイディアの根底には、両者が有する目標の違いがある。あらためて確認するまでもなく競技スポーツの目標は、勝つことにある。この目標は、教育としてのスポーツに比して、格段にシンプルであるように思われる。したがって競技スポーツでは、スポーツを通して参加者が得る恩恵や弊害が、教育としてのスポーツに比べ同定しやすい。このため教育としてのスポーツは、競技スポーツの成果から、留意すべき要素を学び、また転用していけるのではないか（図２）。他にも競技スポーツでは、体力・運動能力や動機づけの面で、参加者のもつ質が一定の可能性が高い。このため競技スポーツでは、参加者の多様性をあまり考慮することなく、教えと学びをめぐる相互関係について調査できるのではないか。

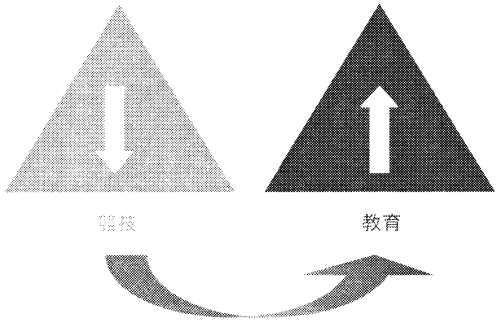

図２　競技から教育への知見の転用

以上のようなアイディアの方向性、すなわち競技と教育とが知見を交換し合うという視点は、決して真新しいものではない。しかしながら従来は、教育から競技の方向に知見の流れが偏ってきた。本アイディアは、両文脈が備える特性をあらためて見直し、これまでとは別の方向から協働を考えようとするものである。そしてこのとき欠かせない役割が、先述した研究者のものであるように思われる。ここで役割とは、競技と教育の二つの現場を行き来し、共通言語を用いて両文脈を結ぶのみならず、大学のもつ人的・物的資源の積極的解放も含まれる。以下では、知見転用の具体例について述べていく。

4．転用の具体例

筆者は現在、Ｊリーグの下部組織を対象とした調査を継続的に行っている。200Ｘ年度は、あるクラブの中学生チームを対象に、一年間のフィールドワークを実施した。収集したデータは指導者の発話であり、指導者にはＩＣレコーダーの装着を依頼した上で、指導中の発話をすべて記録した。また指導者には、調査に先立ち35名からなる選手の評価を依頼し、これに基づいて選手を３つのグループ（高得点群＝優秀層、中得点群＝中間層、低得点群＝問題層）に分類した。すると、指導者によるはたらきかけ（ここでは選手の名前を呼ぶ‘呼称’に着目した）には、量的・質的に偏りがあり、中間層は他の層に比べて常にはたらきかけの少ない選手集団であった。また、こうしたはたらきかけの偏りは、他の選手に可視化されやすい指導状況で特に顕著であった（梅崎、投稿中）。

‘何も言わなくても一生懸命取り組む選手’（指導者インタビューより）とみなされる中間層へのはたらきかけが少ないという調査結果は、何を示唆しているのだろう。筆者は現在のところ、1)指導者のはたらきかけが無自覚のうちに固定性を帯びており、2)選手の‘位置’は指導者を中心とした関係性によって構築されている、との考察を進めている。あるいは中間層の選手たちは、優秀層に負けたくないという思いで、日々トレーニングに励んでいるのかもしれない。しかし、指導者側のまなざしと、まなざしに由来する働きかけの量・質の問題が、それを阻んでいるとするならば、残念であるという以外にない。事実、調査対象としたチームはその年、目標とする大会で勝つことができなかった。以下はまったく想像の域を出ないが、あるいは中間層へのはたらきかけが増し、チーム内の競争が喚起されたならば、目標は達成されたかもしれないのである（評価得点と公式戦出場回数には有意な相関が示され、すなわち公式戦への出場は、期待される優秀層に限られていたことが確認されている）。

そもそもこの調査は、指導現場によくある二つの言説を批判的に検討する目的で行われた。一つは動機づけや性格といった、取り組みの個人内還元主義的な言説である。本研究では選手の取り組みが、指導者のまなざしと周囲の関係性に起因する可能性を見出し、よくある言説に楔を打つことができた[注1]。もう一つは指導現場にある経験主義的な言説である。あるいは指導者によるはたらきかけの偏りなどは、指導者にとって経験的に実感されてきたことかもしれない。しかしながらそうした実際を省察の対象とし、実践の改善を促すアクションへとつなぐためには、データを示して議論を展開する以外にない[注2]。

翻って教育の現場ではどうか。同様の言説が教育の現場にもあり、あるいは児童・生徒たちは、ますますスポーツに親しもうとするきっかけを失っているのではないか。先に教師を主な対象として行われたシンポジウム（梅崎、未公刊）において、本研究の結果を紹介した際、参加者である教師から得られた反応（学校現場でも似たような問題がある）は、知見の‘競技スポーツ発、教育としてのスポーツ行き’の可能性を抱かせるものと考えられる。

5．スポーツは人格形成に寄与するか

つぎに、スポーツの間接的な効用についてあらためて考えておきたい（図３）。この問題は、教育としてのスポーツはもとより、競技スポーツにおいても関心の高い問題といってよい。一般には、スポーツの存在意義とも受け取られ、大人が子どもに運動を与える動機となる場合も少なくない。

結論を先に述べれば、スポーツがもたらす様々な効用については、肯定的・否定的結果がそれぞれ報告され、一致した結論は得られていない。たとえば1)集団スポーツは社会規範を養う、2)競争は敵対心をあおる、3)運動器官の障害や精神的ストレスを

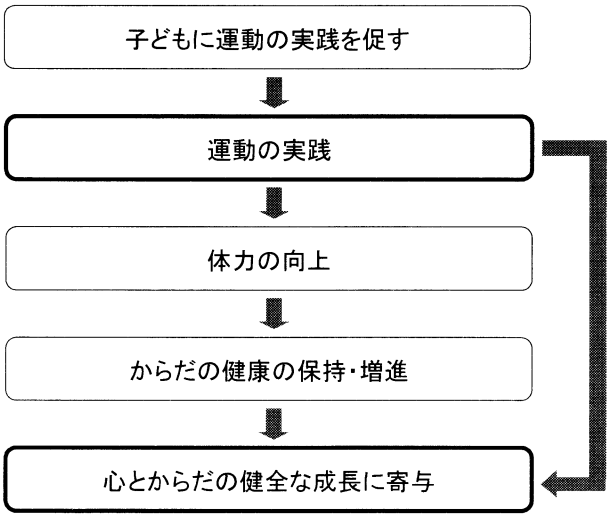

図３　スポーツに期待される効果（宮下、2002）

引き起こす、4)うつ症状を軽減しポジティブな心理状態をもたらす、5)非行防止に寄与する、6)よい健康習慣をもたらす、7)肥満予防に役立つなどである（宮下、2002)。スポーツは人格形成に寄与するかといった問題も状況は似ており、市村（2008）は、過去に示されたいくつかの肯定的な結果について、先入観に基づくデータ選択の可能性を指摘する。その上でこの問題の回答には、スポーツと人格を、それを構成する要素に分解し、要素間の関連を注意深くみていくことが必要であるとしている。この市村(2008)の提案を整理し、具体的な作業課題に整えたのが杉山(2008)であり、本稿の論旨とも合致するので取り上げたい。

杉山（2008）は、人格といったメタ心性を一度棚に上げ、行動として表面化される社会的スキルに着目する。社会的スキルとは、ストレスへの対処やコミュニケーションの仕方など、人が社会生活を営むにあたって求められる種々のスキルをさす。競技スポーツにおいても、こうしたスキルの発揮が求められるが、むしろ競技スポーツでは、社会的スキルとは別次元のスキル発揮が求められる。すなわちプレーに当たって必要なスキルのことであり、サッカー競技であれば、転がす（コントロール)、運ぶ（ドリブル)、配る（キック）といった類のものである。よく知られるようにスポーツでは、仕上げとしてのゲームに先んじ、多くの時間がこうしたスキルトレーニングに割かれる。つまり、スポーツにおいてスキルトレーニングは、実に馴染みの深いものといえる。そうであるとすれば、社会的スキルをトレーニングする場としてスポーツを活用することは、関係者にとって違和感なく受け入れられるはずだというのが、杉山（2008）の主張である。加えて競技スポーツが、社会的スキルの発揮が求められる文脈である点を考慮したとき、擬似シミュレーションの場として競技スポーツを活用することは、大いに理に適っているといえるだろう。競技を社会的スキルのトレーニングの場と見なし、得られた知見を教育に転用していく試みは、三者（競技－大学－教育）連携に向けられた最大の期待事項かもしれない。

6．まとめ

最後に、競技スポーツと教育としてのスポーツの間に位置する研究者の、今後の課題について述べる。

本稿４節では、教育としてのスポーツに転用できる可能性をもった知見について紹介した。競技スポーツでは他にもこれまでに、教育の文脈に転用できる知を排出してきている。これらを実際に教育実践へと活かすアクションがいま、求められている。先の梅崎（投稿中）を例に作業の手続きを述べれば、第１にこの知見を、実験によって実証していくことが求められる。梅崎（投稿中)は、リアリティ十分なフィールドにおいてデータが収集されている点に最大の特徴をもつ。しかしながら、他分脈への転用を念頭に知見を一般化することが、教育文脈での受け入れをスムースとする前提になるならば、統制された状況で実験データを得ることは欠かせない。これを踏まえ第２の作業では、競技の場と教育の場とで、同じ子どもを調査対象として追跡することが求められる。梅崎（投稿中）では、中間層の選手が競技の場で、十分なQuality Of Life（ＱＯＬ）を得ていない可能性をみた。このような子どもたちは、あるいはその時点までの体力・運動能力は高いかもしれない。しかし、それ以降の長い人生において、引き続きスポーツに親しむことは保障できない。こうした競技に対するバーンアウトを多面的に捉えていく視点は、以前に検討されてこなかったものであり、スポーツ選手のセカンドキャリア（引退後の生活）の問題にも一石

を投じることが期待される。研究者の往復により、多文脈に生きる子どもの健全な発達を、スポーツの活用という立場から支えるのである。荒井（2008）は競技力向上に携わる心理学者の立場から、現場の知を科学的に評価・再発信することと、現場の実践者に焦点化した支援の必要性を説いている。このように、体力・運動能力の格差というわが国のスポーツ教育が抱える問題に対しては、競技スポーツと教育としてのスポーツの間で、すなわち指導者と教師のはざまで、両者をつなぐ研究者の立ち位置が問われているのである。

7．注

1）動機づけがあるために行動するという図式が，人々のもつ素朴な信念である．梅崎（投稿中）では，行動の背景にある動機づけがあくまで構成概念である点を再確認した．すなわち，まなざす側のまなざし方により，動機づけが‘ある’ように見える者と，‘ない’ように見える者へのはたらきかけが異なってしまう点を指摘した．

2）調査終了時点で実施したインタビューにおいて，調査対象者である指導者が本結果を眺め，「やっぱり勝ちたかった（ために優秀層へのはたらきかけが増した）んですかね」と述べている．この指導者は調査前のインタビューで，「選手皆に声かけをするよう努めている」旨，発言している．筆者はこうした実際を，自戒を込めて，指導の現場でよくあることと捉えている．

8．要　　約

わが国が抱えるスポーツ教育の課題は、スポーツ従事の二極化と、これに伴う体力・運動能力の格差にある。この差を埋め、かつ社会性を育む場としてスポーツを活用していくために、競技スポーツの成果を教育としてのスポーツに転用していくことを提案した。文脈を越えた協働のため、これを牽引できる研究者の役割について言及した。

9．文　　献

荒井弘和（2008）．心理学は競技力向上にどのように寄与して行くのか(2)　日本心理学会第72回発表論文集，ＷＳ31.

市村操一（2008）．子どもの人格形成に果たすスポーツの役割を考える　児童心理，884，2－8.

宮下充正（2002）．子どものスポーツと才能教育　大修館書店　pp. 157－159.

文部科学省（2007）．平成17年度体力・運動能力調査結果について　2007年10月６日
〈http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/10/06100304.htm〉（2008年10月２日）

杉山佳生（2008）．スポーツ体験を通して学ぶもの　児童心理，884，17－22.

梅崎高行（投稿中）．競技スポーツにおける指導者のはたらきかけと中間層の構成

梅崎高行（未公刊）．競技スポーツにみられる問題　第19回教育フォーラム「スポーツ教育再考」，山梨大学，2008年７月27日